

# イタコと恐山

—イタコの口寄せ物語—

小林 栄

## 目次

はしがき	第一章	イタコと恐山
一	二	イタコについて
二	三	恐山について
三	第二章	イタコと恐山
招霊	イタコの口寄せ物語	
物語	招霊	
仕事	送別	
結	注	
び		

## はしがき

日本民族の宗教的遺産の一つとして考えられるものに、霊媒がある。すなわち、「神がかり」の状態(憑依現象)に入った者が、神霊、死者の霊、あるいは時に生者の霊を呼び「おろす」ものである。宗教学ではこの様なタイプのを「シャーマニズム」と呼んでおり、古来よりの神道においては、「シャーマン(巫女)」が重要な役割をはたしてきた。けれども、神社神道においては、時代の変遷につれて巫女たちの性格はすっかり変化してしまい、今日では、戦前から格式をもった神社の巫女たちの中に、憑依現象をみることとは皆無となってしまう。そして、この特殊な霊的能力は、もっぱら庶民信仰的な分野の中に受け継がれてきている。たとえば、「口寄せ」、「きつねつき」、「祈祷師」などと呼ばれる人々は、この憑依現象をかれらの中心的な宗教活動とする人々である。

筆者は、終戦まで、この憑依現象の豊かな環境に育ってきたので、今日宗教学を専攻する身となっても、この種の現象については特に強い関心をもちつづけてきた。そして、「口寄せ」の最も素朴なタイプのもので、現在も猶民衆の間にあつて相当活動しているものとして、東北地方における「イタコ」があり、何時かは実地調査を試みたいという希望をもっていた。

ところが、幸いにも今年の七月、時間を割くことができたので、イタコ研究にとって一番都合のよい、青森県下北半島の恐山おそれざんにおける地蔵講に出掛けた。七月二〇日から二三日まで、殆ど終日取材に費やした。恐山には、今年はちょうど三〇名のイタコが集まったが、彼女達の「口寄せ」を延二〇時間にわたり録音した。更に、帰途、弘前におもむいて、イタコに関連ある久渡寺くわたと報恩寺を訪ね、それぞれの住職にも面談してきた。

イタコと恐山 (小林)

帰宅してからは、テープの内容を検討して適当と思われる資料は筆記し、さらに、内容や形式によって分類整理するやっかいな仕事に没頭した。一方では、入手出来る文献をもとにしてイタコに関係あるデータをまとめてみた。この小文は、以上のような経過のうちに出来たわけであるが、まだイタコ研究の第一段階にすぎない。より総合的な研究の為に、青森県金木町にある川倉地蔵の大祭と、同県弘前市の久渡寺の大祭は、欠かすことが出来ないと思われる。また、特定の祭りの時期以外の、普通の場合におけるイタコの生活なども、もちろん調査されるべきである。これらの研究を更に進める為には、少なくともあと数回の調査旅行を必要とするであろう。

右のような制約を感じつつ、本文はまとめられたが、敢てこの小文の特色を云わせてもらえるならば、それはイタコの「口寄せ」において語られる「物語」の分析である、と申したい。この分析は、実証的な資料にもとづいたものであって、川倉地蔵や久渡寺における大祭の資料を入手しない以前でも、十分に意味があると筆者は考える。と云うのは、久渡寺の住職や、恐山であったイタコの世話役の人などの話から、筆者が恐山であったイタコたちが、恐山、川倉地蔵、久渡寺の大祭を巡回することが証明されたからである。

従来のイタコ研究が試みられてきたのは、もっぱら民俗学的な立場からであって、その角度からの研究資料は少ない。筆者は自分自身の立場から、あくまでも宗教現象としてとらえ、問題を展開させようと努めたが、それがどの程度満足になされているかは、読者の批判にまかしたいと思う。

猶、この小文を作るに当って、神戸平安教会牧師、竹内郁夫氏夫人（旧姓清藤豊子姉）に、深い感謝の意を表した。竹内夫人がまだ神学部学生として、筆者の宗教史の講座を受講しておられた時、恐山のイタコについて優れたレポートを書き、又貴重な資料を提供された。<sup>(1)</sup> 筆者がイタコについて特に興味をもつようになったのは、竹内夫人によ

るものである。又、恐山宿坊では、予約宿泊の参詣者で満員であったにもかかわらず、特別な配慮をいただき、宿泊の便を与えられ、為に三日半の研究活動を十分に果たすことが出来たのも、有難いことであつた。さらに、宿坊において同宿する機会をえた作曲家、八木伝先生からは、御専門の立場から、イタコの物語の「節まわし」について、色々御教示をいただいた。弘前市久渡寺の住職、高坂智晋氏と、報恩寺の住職、小林隆男氏からも、それぞれ貴重な助言をいただいたことにも、深く感謝したいと思う。

## 第一章 イタコと恐山

### 一 イタコについて

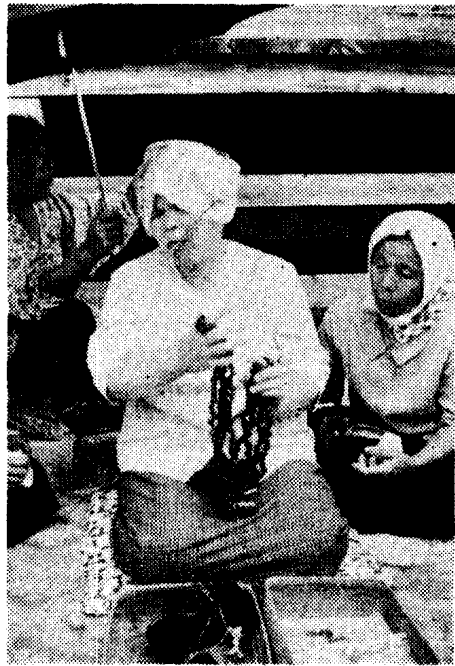
順序として先ずイタコの現状を説明し、それから歴史的な背景に進むことにしよう。「イタコ」とは一体どんな人々で、その職業の内容はいかなるものであろうか。イタコは、イチコとも呼ばれ、東北地方でも特に青森、岩手、宮城の諸県に多くみられる「口寄せ」の巫女のことである。むかしは、これらの地方では、盲人の女性の職業と考えられたが次第に少なくなっている。反面では、目あきの婦人でも、これを職業とする者が出てきており、筆者が恐山であつたイタコについて云うならば、三〇人のイタコの中で、全盲のイタコは一〇名、準全盲ないし弱視が一〇名、そして正眼者は一〇名とそれぞれ三分の一ずつとなつていた。<sup>(2)</sup> イタコと云うのは女性にたいする名称であるが、同様の霊能的職業を男子が行なう場合、かれを「ゴミソ」とか「カミサマ」と呼ぶ。ゴミソの数は極めて少ないと云われている。恐山では、遂にゴミソは一人も見なかつた。

イタコやゴミソがおこなう「口寄せ」とは、死者の霊をこの世に呼び出して、家族や親族たちが、イタコの口をか

りて語りかけられる死者の言葉に耳をかたむけることである。この風習が強く残っている地方の人達は、「おろす」と言う言葉によってそれを表現する。たとえば、今自分の死んだ兄をおろしたい者は、イタコに兄の命日と性別とを告げる。命日と性別とだけで充分であるが、イタコはさらに依頼者と、おろそうとしている霊との関係、既婚未婚の別、子供の有無などをたずねることが多い。関西地方に多い「神がかり」を事とする祈禱師は、普通依頼者と死霊との会話形式をとる者が多いが、イタコの場合は、死霊はイタコの口を通して、一方的に語りかけるにとどまる。したがって、イタコの口寄せの場合は、イタコから、関係について質問されたりする他は、依頼者はだまつて聞くだけである。イタコは語りつづけ、それが終われば、それで口寄せはすんでしまう。

ここで、「イタコ」と言う言葉の意味について考えてみよう。民俗学の大家であった故柳田国男氏が、これに関して、柳翁閑談の中で解説しておられる。それによれば、「イタコ」と言うのは、「口誦する」と言うことで、たえず神がかりして、何か唱えているところからきており、東北地方の巫女をイタコと云うのは、ここからきているというのである。<sup>(3)</sup>しかし、同氏はイタコの「コ」については説明をされていない。この点について、筆者は極めて常識的にはあるが、津軽弁の特色である、「コ」をよく単語のおわりにつける習慣として理解している。たとえば、「いぬ」  
「ねこ」「むすめ」などと云わないで、「いぬっこ」「ねこっこ」「むすめっこ」など云うのと同じであろう。「イタコ」が「イタコ」と変ってきたものと考ええる。

つぎに、イタコの服装、所持品について特色あるものを紹介しよう。イタコは、まづ自分の場所が世話役から決められると、そこに毛布やふとんをおき、縦四〇センチ、横三〇センチばかりの小さな柳行李をあけて、自分の前におく。そこには、自分がイタコであることを証明する巻物や、中に何かを入れている円筒形のもの（これを、たすきが



イタコ22号と、物語をきく老婆、背後の建物は地藏堂の軒下である。

わせて音を出しながら、一種独特の「語り調」で死者の霊をおろすわけである。

さて、このようなイタコが、どうしてイタコとしての身分、資格を取得するのであるか、と云う問題については、まだ現在では、断定的な事は云えない。恐山で会った青森の新聞記者は、弘前の久渡寺がイタコの免状を出している、と教えてくれたので、この点について詳細に知りたいと思つて、弘前まで足をのばして久渡寺をたづね、直接住職の高坂氏にあつて質問したところ、その様な事実はないと否定された。そして、同氏は、それは同じ弘前市内の報恩寺のことであろうと云われたので、更に報恩寺を訪問して、住職の小林氏に面会し、その点についてたずねたところ、同氏もまた同じ様に否定せられた。

しかし、小林氏は、その時イタコの中でも、終戦まで天台宗の盲僧都もろそうずの資格をもっていた者が、現在も一二、三名はあると云う事実と、従来の関係上、今日でも年に一度程度は報恩寺と接触があるとの事であつた。<sup>(4)</sup>同氏の語られた

ところでは、終戦までは、みだりに吉凶判断を下すことは、政府より禁止されていたので、盲僧都という資格を手に入れて、天台宗の指導監督の下に入りながら、一方では庶民信仰の場において、イタコとしての生計を立てていたものであろう、とのことである。

終戦後は、この盲僧都の制度が、天台宗において廃止されているので、現在では、イタコは、天台宗以外の宗派から盲僧都の資格を与えられているのか、それとも宗派には一切関係なくて、師匠と弟子の人間関係によって、いわば伝統的にイタコの職がうけつがれて行くものなのか、いずれかが考えられる。<sup>(5)</sup>この点について久渡寺の高坂住職は、岩手県気仙郡にある大和宗を調査すれば、何か明らかになるであろうと助言を与えられた。又、イタコたちは青森県の岩木山にもつて修業すると云う人々があつたが、これらは何れも今後の調査によって明らかとなつて行くであろう。歴史的に由緒のある寺院が、庶民信仰であるイタコの資格、身分を判定、証明するというのは、どう考えてみてもおかしいことでもある。ただ久渡寺の場合は、大祭に多数のオシラ神が集まり、<sup>(6)</sup>オシラ神をあやつる者が、年毎にオシラ神の着物に寺の判を押しもらい、その判が多い程、オシラ神の格式が高くなるという慣習が残っているので、このような点が誤解されて、イタコに免状を与えているという風評が立っているのである。

このようなイタコの資格決定の問題は、われわれの関心を、イタコの歴史的な発生の時代についての問題にみちびくのである。ふつうはイタコとイチコとを区別しないで考えられているが、今、両者を全く同一視する立者から、発生の時代を考えるとすれば、おそらく神話時代にまで遡及しなければならぬ。しかし、文献的な実証を求めるとすれば、女王卑弥呼の時代にイチコと呼ばれる者がおり、天文地文に通じ、吉凶判断をした、と書かれたものがあると報恩寺の小林住職は語っておられた。イチコの「イチ」が神を「いつく(来臨の神を接待し、祭るの意味)」と云う言

葉が転じて「いち場」となり、やがて「いち(市)となった」と云うことと関連させれば、やはりイチコの発生はその起源を明確には定められない程の過去となる。<sup>(7)</sup>

けれども、筆者は現在の社会に残っているイタコと、右に述べたようなイチコを一応区別して、あくまでも死霊の口寄せと云う職業としてのイタコの発生年代を考えてみたいと思う。恐山などにおいてみられるイタコは、神霊は取りつがないで、死霊に限られていた。そしてかのじよたちの口寄せが、豊かな「物語り調」である点から、平家物語を吟弾した琵琶法師の発生以前にさかのぼることは不可能であろうと思われる。徒然草によれば信濃前司行長が、平家物語を作りながら、それを盲目の琵琶法師、生仏しやうぶつに教えて、吟弾させた<sup>(8)</sup>と誌されている。ところで、行長に平家物語を作らせたのは、当時の天台座主慈円であった。このように、天台宗と平家物語の間には、密接な関係があり、又、物語を吟弾した琵琶法師、生仏が、強い仏教音楽の影響をうけていたと云う事実は、天台宗と琵琶法師との関係を証明するものでもある。史実に照してみても、すぐれた琵琶法師に、天台宗から、検校、勾当こうとう、勾当試補、法橋と云った呼称が与えられている。江戸時代には天台宗の天海上人が、盲僧都もうそうずと云う資格制度を作ったが、戦前よりのイタコの多くがこの資格をもっていると云う事実は、天台宗と琵琶法師、さらに盲僧都としてのイタコに至るまでの歴史的な関係を示している。戦後は、天台宗において盲僧都の制度を廃止しているので、現在は直接の関係はないが、盲僧都として、検校の身分を与えられている者で、イタコを生活の業としている者は、今でも報恩寺の間接的な指導の下にある。

イタコは、広い意味でのシャーマニズムのカテゴリーに含まれるけれども、現在見られるが如き、もっぱら死霊をおろすことを職業とする性格をもち、しかも、それが「物語り調」を特色とする点などからして、イタコは少なくとも



も盲人琵琶法師を直接の源流とし、鎌倉時代以降に長い年月の経過のうちに、今日みられるが如きものとなったと筆者は推測する。

## 二 恐山について

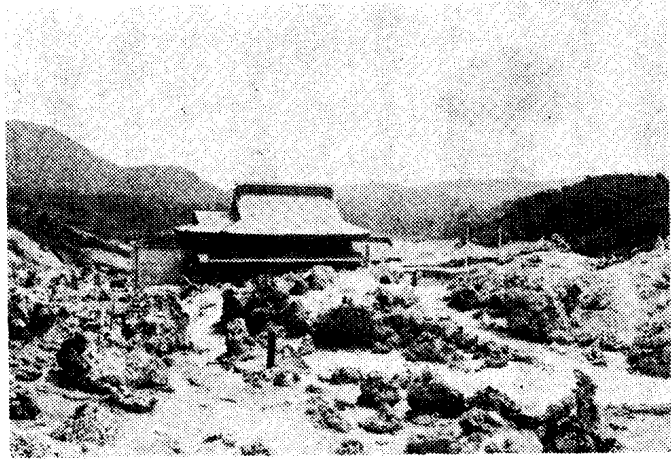
恐山というのは、俗称とも云うべきもので、正確に云うならば、青森県むつ市の田名部たなぶにある曹洞宗の円通寺に属する霊場としての、恐山寺の境内を意味するのである。恐山は、下北半島のほぼ中央にある海拔八二八米の宇曾利山うそりのことである。この宇曾利山は、八つの霊峰からなっており、それがあたかも蓮八葉のような恰好で、その中央に盆地があり、そこに宇曾利湖という直径二キロメートルたらずの円形の湖がある。宇曾利と云うのは、アイヌ語の「凹んだ所」とか、「湊潟」を意味する「ウソリ」からきており、この「ウソリ」が「オソレ」となったものであると云われている。この湖は火山湖であって、湖から恐山寺の境内を含めて、「血の池地獄、修羅の地獄、八万地獄、賭博打の地獄、金堀地獄」などがあり、多くの硫黄孔や酸化硫黄泉などが出ている。これらの地獄は、別府のような大規模な地獄を知る者にとつては、全く名前だけの、魅力なき地獄である。他に「賽の河原」があり、宇曾利湖畔には「極楽ヶ浜」があつて湖の対岸に美しい山々をみる事ができる。恐山温泉と云うのがあるが、これは寺の境内にある四つの浴場である。露天風呂に屋根と囲いをした程度の小屋であつて、そのうち宿坊にもつとも近い薬師の湯は、僧侶の専用となつていた。この専用風呂を除いた三ヶ所には、参詣者は無料で何回でも入れる。恐山に行くには、野辺地のへちより大湊線で大湊まで行き、さらに大湊で大畑線にのりかえて、田名部で下車する。そこからバスで約五十分、タクシーなら二十分である。別に国鉄青森駅から田名部まで、乗りかえなしの急行バスの便も

ある。田名部の町はずれから次第に砂利道は上り坂となり、やがてひばの原始林を走ること十分余りで、急に視界がひらけたところが宇曾利湖の湖畔である。左手に美しい湖と、その背後にある山々を眺めながら走ると、やがて「三途の川」につく。車をおりてみれば、途端にプンと硫黄の匂が強く鼻をついた。三途の川をのぞき込むと、硫黄分を含んだ水が川石をすっかり変色させて、いかにも地獄への入口にふさわしい無気味な感じを抱かせる。この三途の川には、赤い太鼓橋がかかっており、徒歩の者は霊場に入るに先立って、ここを通る。案内のパンフレットによれば、罪深い者には、この橋が細い糸のようにしらかみえないとのことである。<sup>(10)</sup>

三途の川をわたって四・五〇〇メートル進むと、いよいよ霊場恐山の門である。京都などの名刹にみられるような門を予想すると、いささか期待外れになる。門の右手にはバラックの案内所があるが、さらに門の左右には、むかしの関所のように、格子模様の木の垣が二、三〇米つづいている。門の前に立って、筆者は一種異様な感を抱かざるをえなかった。いわゆる仏教寺院といったイメージとは何か違った、殺伐さ、荒涼さが強く心を打った。まるで西部劇に出てくる砦のような印象であった。これが高野山、比叡山と相並んで、日本三大霊場の一つとして称せられているとは、どうしても考えられなかった。どう云うわけで、ここでは荒涼とした味気なさを感ずるのであるか。死者の霊がたえずさまよっているからだろうか。などと考えてみたが、しばらくして、境内に樹木が一本も生えていないことや、普通の寺院にみられるような、寺院らしい建築物が、門から三〇〇メートル程進んだ正面に一つあるだけで、そこまでに至る左右にある建物は、戦後程なく建てられた校舎のような感じのするもので、なかには建築現場の飯場のようなバラック建てのものがあるばかりだからだ、と云う事実が気がついた。

正面の寺院らしい建物は、本尊である延命地藏尊をおまつりしている地藏堂であることがわかった。その後方には、

イタコと恐山（小林）



「賽の河原」から見た恐山寺の地蔵堂、イタコたちは地蔵堂の周囲に集まっていた。

地蔵山という小高い丘があつて、そこには木はあるが、それ以外のところには殆んど青さが無い。赤茶けた土や、石灰を強く含んだ土、火山砂、硫黄色になった岩などが一面にあつて、広い境内は何処に行つても、硫黄の匂いからのがれることは出来ない。時計の金属性バンドは半日で黒く変色してしまつた。特に地蔵堂の左手にある小高い「無間地獄」は、この世のものとは思われず、あちこちの岩のさけ目から硫黄のけむりがふき出しており、ところどころには小石をつみ上げて、そこに駄菓子、花、わらじ、一円貨幣などがおかれている。一万坪以上ある境内の半分以上は、寺の境内と云うよりは、この地上に、地獄の一部が移されたと思われる程の無気味さを感じさせるものであつた。この場所、イタコたちによつて死者の霊が呼びおろされると云うのは、心憎い様に効果的な演出であると筆者には感じられた。

ところで、この恐山は何時頃に開かれたものであろうか。伝えられるところでは、同寺は慈覚大師(円仁)の開山によるものだとされている。慈覚大師は七九四年(延暦一〇年)に生まれ、八三八年(承和五年)唐に留学し、約一〇年滞在の後八四七年に帰国した。その後延暦寺三世の座主となり、いわゆる天台宗山門派の祖となつた。かれについては、「入唐求法巡礼行記」などにより余りにも有名である。東北地方には慈覚大師の開山にかかる寺としては、平泉の中尊寺、松島の瑞巖寺、福島の霊山寺など多く、八六四年(貞観六年)に山形市外の立石寺において寂滅したと伝えられる。恐山は、貞観年間に大師によつて開山されたと云われている。貞観年間とは八五九年から八七五年までであるが、

大師は八六四年に死去しているから、貞観元年から六年までの間ということになる。

恐山がたしかに慈覚大師の開山によるものか否かについては、伝説的な言い伝えもある<sup>(11)</sup>。又東北地方の有名な寺院で大師の開山によるものが多く、山形においてなくなったという史実などからして、一応信頼するに足ると考えてよい。とも角、恐山の霊場は、最初に開かれた時には、天台宗のものであった事は明らかである。そして六〇〇年近くの間、天台宗の行者たちの修行道場とされていた。康正年間(一四五五〜一四五六)に、最宝院大諦と云う天台宗の行者があつたが、ある乱に連坐した為に、恐山も全く取り壊されてしまった。が、その後一五三〇年には、田名部円通寺の開祖であつた曹洞宗の聚覚和尚が再興した。

この様ないきさつがあつて、現在この霊場は曹洞宗円通寺の一部とも云うことができる。曹洞宗に属する寺院の中で、死者を口寄せするイタコが大ぜい集まつて、まるでこの大祭の主役のごとき観を呈している。この場所が以前は天台宗の寺院の所在地であつたとしても、一度は完全に取りつぶされて再興までに一〇〇年近くを経過してしまつたのであるから、伝統の継承などは問題にはならないであろう。それでは、イタコと恐山との結びつきは、何時頃から始まつたものであろうか。次項において、その問題について少しくふれることにしよう。

### 三 イタコと恐山

イタコそのものの歴史については、本章のはじめに述べたように、少なくとも鎌倉時代の盲人琵琶法師と、民間信仰的な巫女との習合の結果、次第に発達してきたものとみるのが、最も妥当なものと思われる。問題は、このイタコが何時頃から恐山と結びつく様になつたかと云う点である。従来、イタコは、必ずしも恐山のような特定の時期と場

所とが与えられなくとも、各地を遊行したり、求めに応じて口寄せをするのが、主たるものであった。一年にわずか三日や四日の収入ではとても生活は出来ない。調査した結果、イタコと恐山との結びつきは、比較的新しい、と云うことが判明した。

筆者は、まづ恐山の若い僧侶に質問してみたところ、はっきりとは知らぬが、明治以前とは考えられない、とのことであった。イタコと恐山の関係にいつては、前に言及した久渡寺とオシラ神との関係と共通性があるように思われる。久渡寺が、どうしてオシラ神との関係で有名になったかと云うと、文献によれば次のようになっている。明治三〇年頃に、久渡寺の住職が寺院維持政策として、同寺の本尊が、オシラ神の本地仏であると主張し始め、それによって、次第にオシラ神が大祭に集まるようになり、集合祭祀の実績が作られてきたものである、と。<sup>(12)</sup>

さて、筆者が久渡寺の住職高坂氏と対談した時に、オシラ神やイタコが久渡寺の大祭に結びつくようになったのは、明治二〇年以降であると語っておられた。前の文献とは一〇年の開きがあるが、とも角、明治二、三〇年から慣習となってきたのであろう。同住職との対談で、たまたま川倉地藏や恐山のことを話題となり、高坂氏は、川倉地藏や恐山とイタコとの結びつきは、久渡寺のそれよりは早くはなく、同時代か、或いはそれよりも少しおくれていたであろう、との事であった。同氏は、何れにしても廃仏棄釈以後の関係である、と語っておられた。けれども、廃仏棄釈となると、明治初年のこととなつて、再び年代問題は複雑となつてくる。ただ、高坂氏が、廃仏棄釈という言葉によつて、この過激な仏教攻撃の嵐のために民衆は寺院より離反し、寺院は維持経営の問題で深刻な事態をむかえたことを意味されるならば、それはそれでよいのである。民衆の反動的な傾向を是正し、再び寺院と結びつける為に、庶民の信仰の中に深い根をもっていたイタコやオシラ神を、寺院の大祭に参加させようとしたのかも知れない。

高坂住職は、久渡寺が春の大祭で、イタコたちに職場を提供していると語られた。イタコたちは、大祭に参詣してくる人々を相手に、口寄せをおこなう。そして、口寄せに対する謝礼を受け取って生計を営むにあたって、久渡寺は営業の場所を与えるのである。本質的には、お寺の境内に出店を開いて、みやげものや食物を売るところはないかも知れない。

恐山においても、同じことであろう。著者が「無間地獄」で会って話したオシラ神をあやつる老婆の語ったところでは、ちょうどその前夜、寺院側とイタコのグループとの話し合いがされて、今年から、イタコ一人につき、二・〇〇円をお寺にわたすようになったとのことであった。<sup>(13)</sup>ところが、乞食同様のオシラ神の老婆には、之は大変な負担となるので、一体何の為に恐山に交通費までかけてやって来たのかわからない、と非常に困惑していた。

少し経済的なことになったので、イタコの恐山における状況にふれておこう。今年は、恐山では、イタコにたいして、一人の死霊の口寄せを依頼すれば、一〇〇円が協定価格であった。<sup>(14)</sup>イタコによつては依頼者があとを絶たず、終日多忙をきわめた者もあったが、かなり時間をもて余すイタコもあった。筆者の推察するところ、多い目みて一人一日平均が、六〇名から七〇名という程度である。恐山の大祭(地蔵講)は七月二〇日から二四日までだが、二〇日と二四日は参詣者はずっと少ない。之に比べてオシラ神の方は、わづか二人集まっただけで、かのじよたちは口寄せが出来ず、ただオシラ神をあやつるだけであるから、顧みる人々は殆どなく、たまたま親切な人があっても一〇円貨幣を与えるのはよい方であった。

恐山の地蔵講は、本尊延命地蔵をまつり、大施餓鬼と大般若祈禱法要がおこなわれるというのが寺院側の主張である。たしかに多くの参詣者は先祖の為に塔婆を立て、読経し、冥福を祈るけれども、恐山にくる一番の関心事が、イ

タコの口寄せにあることは、まず否定できぬところであろう。観光バスにのって、仙台からも参詣していたが、かれらたちは、まず地藏堂で僧侶による法要をすませてからは、宿坊に旅装をとぎ、早速イタコのところにきて口寄せをたのむ。そこで今はなき家族と声の対面をして涙を流す。それがすんだならば、混浴温泉でバス旅行の汗を流し、宿坊の畳にゴロ寝して、持参の酒やビールをたのしむ。夜ともなれば、広い境内にはカーバイトの明るい光のもとに夜店や大道芸人たちが客を集めはじめ。適当にのみ、食べてからは、ゆかた姿で広場に円陣を作り、何時つきるともわからぬ盆おどりが次第に調子づいて行くのである。おどりの歌は津軽弁、下北弁などいろいろあって、われわれには皆目見当がつかない。しかし、男女間の情事をテーマとしたものが、非常に多いと土地の新聞記者は語っていた。昼間は肉親との声の対面で、サメザメと泣いていた中年の婦人が、別人のように歌い、笑い、おどつていたのである。実に見事な転換ぶりである。

恐山が多くの参詣人、観光客をひきつけるようになったものは、その異様な自然的環境と、それを背景にしたイタコの口寄せ、さらに加えれば、気楽な宿坊と温泉であろう。そこには素朴ではあるが開放感が強く存在する。もしここでイタコが恐山から姿を消せば、恐山に対する興味は少なくとも半減することは間違いないと云えよう。久渡寺でも恐山でも、直接イタコとの関係はないと云うけれども、恐山では大祭中、境内の建物を定めてイタコとその同伴家族たちを宿泊させている。家族がそれぞれ自炊し、イタコを職場に送り出し、昼には弁当を届けている。こうして寺院側も何かとイタコ達の為に便宜を計ってやっている。だから、実際は、両者にはつかず、離れず、平和的共存の姿がみられる。以上でイタコと恐山について概説したから、次章では、恐山におけるイタコの口寄せの内容(物語)を分析してみよう。

## 第二章 イタコの口寄せ物語

本章は、恐山における三〇名のイタコを対象として作った録音テープの中から、比較的内容があつて、共通性の多い十名のイタコのテープをもとにして、出来る限り正確に筆記し、整理したものである。録音と平行して三〇名のイタコの写真を撮り、イタコに一連番号を付したので、あとでイタコの物語を直接引用したりする時に、イ二二号とか、イ八号などと呼んで区別をした。又、テ一一Aとあるのはテープ番号一一で、Aはテープ反転前の意味である。Aのつぎに五―八〇とあれば、それはテープの録音箇所をあらわしている。以上の約束のもとに、イタコたちの物語の内容、その特色、共通点と相異点などを比較検討してみたいと思う。

まず、いずれのイタコにも共通してみられたのは、かのじよたちの物語が、四つの大きな部分から構成されている点である。筆者は、これを (一)招霊、(二)物語、(三)仕事、(四)送別と呼ぶことにしたい。イタコによっては、これら四つの部分をすべて語り終えるまでに要する時間は、もちろん一定しているわけではないし、おろされた霊によって、物語の長短もあるわけであるが、それぞれのケースによって時間を測定してみたところ、

- (一) 招霊 四〇秒——一分
- (二) 物語 五分——一〇分
- (三) 仕事 二分——四分
- (四) 送別 二〇秒——三〇秒

イタコと恐山 (小林)



であった。したがって、もつとも長くて一五分、短くて一〇分と云うところであった。

## 招 霊

招霊とは、依頼者がイタコにたいして、おろしてほしい死霊の命日と性別を告げてから、イタコが数珠をすり合わせながら、語りはじめる最初の部分であつて、この招霊の部分では、イタコ八号と二八号とは非常に酷似した表現を用いていた。

はーやー、草葉のかげの、ほととぎす、四日の仏さん、呼び申そうや。(八号)

はーやー、ごくらくの、草葉のかげの、ほととぎす、二二日の仏さま、呼び申そうや。(二八号)

右の冒頭にある、「はーやー」だけでたつぷり一〇秒はかかる。この二人のイタコの招霊には、ほととぎすなどが出てきて、何か文学的な香がするように思われるが、次のイタコの招霊は、はなはだ単刀直入型と云えよう。

二月の一〇日の男の仏様、一心にこの人を呼びたてまつる。一心の道。(イ二二号、テ一一・B・一四九―一五二)  
 恐山で会ったイタコの中には、一、二名であつたが、殆んど招霊の部を語らず、物語の部から入ってしまう者もあつた。また一方では、招霊の部の表現が、殆んど同じと云つてよいのが前記した八号と二八号であるが、少し違つていても、これら二人と同系統と考えられるのがイタコ二二号である。

はーやー、ごくらくの、いかなる…もふみ越えて、すみのみやま、おくやまの…一〇日のほとけさま呼び申そうや。  
 (イ二二号、テ一一・A・一〇二―一〇七)

この二二号の場合には、「ほととぎす」が出てこないが、招霊全体の節まわしは、八号、二八号のそれと殆んど同じで

あつたと断定してもよい。

後に取り上げる物語の中でも明白となることであるが、表現法、特に用語や節まわしまで非常に似ていると云う事は、おそらく盲目のイタコたちがこの道に入り、師匠の指導のもとに、物語形式、表現形式、用語、節まわしなどに至るまで、口伝的な伝授によって体得してきたからであろう事を充分に推察させるものである。師匠がちがうと、その師匠の強い影響をうけるようになって、あらゆる点で相異点のはっきりとみられるようになる。もちろん、表現はあくまでも個人次第であるから、適当に改める事も悪いことではない。それにもかかわらず、類似点が少なくないと云うことになる、師匠と弟子の間の伝統の継承と、弟子仲間の交わりの存在が、どうしても考えられてくるのである。

右の様な見方からすれば、八号、二二号、二八号には、何か強い共通性が感取される。この点については、次項の「物語」の中でもさらに比較検討し、特色を明らかにしてみたいと思う。

## 物 語

前項で取り上げた招霊にひきつづいて、いよいよ「おろされた」霊による物語りが始まるが、ここで一言すると、普通の「きつねつき」や「祈祷師」が神がかりの状態に入るときは、突然坐っていたままで、とび上ったり、両手を頭上に高くかざしたり、明白にそれとわかる動作をなすのであるが、イタコの場合には、少なくとも筆者が恐山で会ったイタコは、誰一人として、そのような異常な動作をしなかった。したがって、招霊の部から中心的な物語に移って行くところは、イタコの態度からは全く感じとることが出来ない程に自然である。ただし馴れてくれば、招霊の

部は、一種民謡調の節まわしであるが、物語に入るところからは、いわゆる「語り調」になるので、言葉がわからなくとも、調子の変化で感じる事が出来る。

とも角、この物語の部は、イタコの口をかりて死者の霊が語るわけであって、招霊はイタコが死霊を呼び、招くのであるから、はっきりと区別されねばならない。さて、いよいよ愛する肉親の霊が語りかけてくる。一体どのような語り始めるであろうか。二、三の例をとって、そのままの用語で引用してみる。

いまこそは、つくしの浄土へ呼んでくれたところは、千万かたじけないだ。ひとりうちとなればわがため、ふたうちとなればごくらく、みうちとなれば幾千の山、万でうちきこえて、おしわけ、かきわけ、とおりてみれば、ここは何処だべなともちおいて、いそぎの心で運んでみれば、音にきこえた恐山のお山である。呼ばわれてみれば、うれしいじゃないか、わが並び様や(兄弟のことである)われの………何からお仕事いたせばよいな、語ればよいな、まことに「ならび」に呼ばわれて、ならびの身の上お仕事いたせばよいな、わが子のお仕事いたせばよいな……(イ二八、テ九・A・二九〇―三一〇)

右のイタコ二八号と少し平行類似した内容のある二二号の、招霊につづく物語の冒頭を紹介してみよう。

ここは何処よと、いそぎの心で運んでみれば、音にきこえた恐山の慈覚大師の前じゃ。ほのぼのと呼びかけられて、立ちよてみたところが、さてはめづらしきものじゃ、孫子宝(孫のこと)の顔の対面であれば、うれしいことの次第だ。何から語ればよいな。お前に呼ばわれて、体もないし、姿もないし、かえ姿にかえおえてあれば……(イ二二、テ一二・A・九五―一〇)

招霊の部では、イタコ二八号は、八号と非常に共通するところが多く、二二号は少し相異点があるが、節まわしは

同じであると云ったが、ここで八号の物語の冒頭を引用してみると次のようなものである。

いまこそは、つくしの浄土へ呼んでくれたところは、千万かたじけないだ。ひとりうちとなればわがため、ふたうちとなればごくらく、みうちとなれば九千の山、万でうちきこえて、おしわけ、かきわけ、とおりてみれば、ここは何処だべなともちおいて、いそぎの心で運んでみれば、わが宝や……便りききうけたいともちおいて、慈覚大師様さ、はこんで呼ばわれて、よろこぶ次第のことだべな。何からお仕事いたせばよいな、語ればよいな……(イ八、テ一一・B・一八九―二〇〇)

イタコ二八号と八号の物語導入部は、「幾千の山」が「九千の山」となっているだけで、それ以外は、おどろく程に一致している。両者の表現が変わってくるのは、「いそぎの心で運んでみれば」につづく箇所からである。もちろん、この辺になってくると、依頼者と死者の霊との関係によって、依頼者が自分の孫ならば、「孫子宝」と呼び、子供ならば「宝」とか「わが宝」となる。兄弟の場合には「わが並び様」とか「並び」と云うように、適宜に呼び方を変えて行かねばならなくなる。それまでの、いわば定型化した部分の一致は、おどろく程のものである。

既に定型の中で語られているように、呼びおろされた霊は、殆んど例外なく、呼ばれた事に対するよろこびを語っている。もちろん極めて特殊な例外もないことはないが、肉親を呼び出す場合は、すべて「おろされた」ことに謝意が表明される。こうして始まった物語は、やがてその中心点に入って行くのであるが、その中心点を内容的に判断して区分してみるならば、次の様な諸点に分析されるのである。

まず、生前の自分の生涯を回想してなつかしみ、死に至った過程を述べる。そして、一旦死んでしまった以上は、今更どうすることも出来ないが、せめて草葉のかげから、残された者たちを常に守りつづけている、と云った事を語

るのが、物語の概要である。すなわち物語の中心部を作っているのは、「娑婆世界の回想と、そこに対する未練、あるいは諦観、そして残された者に対する処世訓と、かれらに対する守護の約束」ということになるであろう。これらについて、今イタコたちの言葉を直接引用してみることにしよう。

娑婆世界にたいする回想は、次のような言葉で始まる。

わが世果てた次第語れば、今晚から明日の晩までかたても（語っても）かたりつくされないだ。くどいてもくどきつくされないとも。われも娑婆しゃんばに栄えた時は：（イ二八、テ九・A・二九〇―三二〇）

ここでも、前述のイタコ八号は、最後の辺りが、「わが娑婆に栄えた時は：」となっているだけで、それまでの部分は、符号を合わせたように、びつたりと一致する（イ八、テ一〇・A・三二〇―三三八）。この部分は、他のイタコでも大体共通した表現で、「われも娑婆にいた時は：」（イ二二、テ一〇・A・一一五―一三〇）、（イ二二、テ一〇・A・一九八―二一〇）とか、「それにつけてもあの時は：」（イ五、テ一一・A・一七五―一八五）などがある。

死者たちの、現世にたいする回想によれば、この現世は、「なつかしいところ」であり、また「このしゃんば（娑婆）の浄土は、いつはこんでみても、かわりがたのない、さやかな浄土でもある」（イ二二、テ一一・A・九二―一一〇）し又同時に、「明るいしゃんばはうらやましいが、今更帰ることも出来ぬ」（イ五、テ一一・A・一七〇―二二〇）心残りの多い土地である。「無常の風にさそわれて」遂に幽明境を異にせざるを得なかつた時に、死者たちは、強い執着を娑婆世界に対してもつていたことが、かれらの言葉の中に、強くにじみ出ているのである。「つなぎとめられるものなら、つなぎとめてもみたい」（イ五、テ一一・A・一八〇―二二〇）とこころであったし、「手にもた（もった）もの取られたごとく、片手もがれたごとく」（イ二二、テ一〇・A・二〇〇―二三〇）、また「われに別れた時は、手にも

たものとられた、片手もがれたとはこの事だ」(イ二八、テ九・A・二九〇―三二〇)と思った。更に「杖にすがても(すがつても)生きたいと思った」、「あとをみとどけて、八〇才までも生きたいと思った」(イ五、テ一一・A・一九〇―二二〇)、また「せめて一〇年栄えておれば」(イ二八、テ九・A・三二一―三四八)とくやくしく思う程の去りがたい世界であった。

もう少し具体的な例を紹介しよう。妻を娑婆に残して先立った夫の霊は、仕事を途中で死出の旅路に出発せざるを得なかった点について非常に残念に思い、乳呑み子を背負った四〇才を越えた美しい未亡人に、次のように切々と語っている。

まだ何百万でも働らくオラであたが(あつたが)……シャツもぬれ、ズボンもぬれた、寒いごとくのぬれた身体で顔の対面するのであれば、今晚一時に賽の河原の山端にすれば、お前と顔の対面して話す。

と約束する。しかし、よく考えてみると、自分の姿はもうかくされてしまっているのだから、声の対面はイタコによって出来ても、以前の姿で再び妻に会うことは本当に約束出来るのだろうか。かれは思い直して、

けれどもそれも出来るか出来ないか……ここではお前と声の対面しか出来ない。恋言葉の対面しか出来ない。わが身の姿にしてくれたなら、わが身の姿、何よりの姿である。どれだけでも、くどきつくされないだ。あとをよろしくたのむ次第である。(イ七、テ一〇・A・八〇―九五)

と別れて行く。まさに涙なくしては聞けぬ実感のこもったもので、イタコ七号は特に哀調をこめて物語るのが巧みであったから、この未亡人が激しく泣きながら、一言一句にうなづきつつ聞いていたのは、何とも云えぬ、胸をしめつけられる様な思いであった。この時は丁度朝五時前であった。前夜は宿坊に子供と共に泊り、早朝まだ人が多く出て

イタコと恐山 (小林)

こない内にとやってくるのであろう。その日は恐山にひどい霧がかかっていた。一〇米先きもぼんやりとして見えな  
い程であった。やがてこの未亡人は、ハンケチを目にあて、はげしく肩をふるわせながら、霧の中に消えていった。  
死者の霊が、どれ程この「しゃんば」に執着をもっても、ひとたび「三途の川」を渡ってしまうと、帰るにも帰ら  
れなくなってしまう(イ二八、テ九・A・三四〇―三四八)。だから結局はあきらめるより他ないが、死霊としては、  
この美しいさやかな、浄土に残した肉親に対して、これからの人生を如何に生きて行くべきであるか、処世訓を与え  
るのである。

人の人生には浮き沈みがある。運命、出世は時のまわりである。(イ二二、テ二二・A・一四〇―一四三)  
上をみればきりが無い。下をみてあきらめよ。(イ二二、テ一〇・A・一七五―一八九)

と云った運命論者的な考えや、

夫婦はむつまじく、兄弟仲よく暮らして、親に孝行さだめて、世間様にうやまわれよ。(イ二二、テ二二・A・一四  
三―一五〇)

と五倫の道を教えたり、

人に頭をさげ、人に頭をさげられて行く。(イ二二、テ二二・A・一五五―一六〇)友達をみれば(死霊の友達のこと)、  
われと思うて言葉一つもかけて、仲よくこの世をわたるべし(イ二二、テ二二・A・三〇五―三二七)

と社会における対人関係の重要性をも指摘している。さらに注意はもつと具体的にもなされる。

漢方薬をお茶をのむつもりでのめばよい。(イ二四、テ九・B・二五〇―二五五)これは、依頼者の高血圧を心配し  
ての注意である。さらに又、日に日にはげしさを加える交通事故に対しては、

交通のはげしい折から、充分気をつけて下さるべし。(イ五、テ一一・A・一九〇—二〇〇) というのもある。また人生における信仰心、宗教心の大切な事を次のように語る死霊もある。

神仏の心忘れてはならぬ。人間と云うものは、一人で世をわたるのではない。神は杖、柱になって(なって)、あれや、これやと望みにまかせて進ませている。いくら時世がかわっても(変っても)神や仏の働きに変わりもない。(イ二二、テ一二・A・一四〇—一五八)

もちろん、この様な処世訓的メッセージは、すべてのイタコの物語の中に必ず含まれているものとは云えないが、極端に片寄った物語をするイタコ以外は、多少とも含んでいるものである。

さて死者の霊は、娑婆に残された肉親たちに対して、ただ処世訓を与えるだけにとどまらない。愛すればこそ、死霊は、かれらに出来る方法によつて、何とか肉親の不幸をすこしでも少なくし、祝福された生涯を送るように守護してやることを約束する。

草葉のかげから、お前達の幸せを祈る。(イ五、テ一一・A・二〇〇—二二〇) という消極的なタイプに始まって、

ちようちよ、とんぼになて(なって)みたりして守る。(イ二四、テ一〇・A・三二〇—三二八) という積極型まである。また

一〇中九まで災難のがしてやる。(イ二二、テ一一・A・一八五—一九〇)

二年三年つくしていれば、まだまだよいこともある。やる事、する事に望みをかなわせてやる。(イ二二、テ一一・A・一七五—一七九)

イタコと恐山 (小林)



などは絶対保証型である。聞いている人にとって、この約束ほどに大きな安心感を与えるものはないであろう。愛する肉親が、姿こそ肉眼には見えないけれども、絶えず前に立ち、後より支えて、姿をかえて守りつづけ、望む事は何事でも実現させてやる、と云うのであるから。

さて、いつまでも死霊は語りつづける事は出来ない。次に物語につづいて、依頼者にとっては、より重大な意味をもった「仕事」にイタコは入って行くのである。

## 仕事

「お仕事する」とか「お仕事いたそう」と云う表現をよくイタコは用いるが、それはイタコたちの専門語のようなもので、その内容は依頼者や肉親の将来に関する予言や警告である。イタコによっては、物語の中で処世訓的なものを一切語らないで、この予言や警告にウエイトをおく者もあった。「一寸たちよた(立ち寄った)しるしに、身の上お仕事して帰る」(イ二二、テ一一・A・一五〇—一五三)と云うような表現のうちに、具体的な内容が語られるのである。

この仕事(予言)の中で語られる事は、依頼者本人や、家族のうちの誰かが、○月×日にどんな災難があるか、と云うような、不幸の予言が多い。もちろん、来年は娘が嫁に行くとか、孫が出来ると云ったよろこびの予言もあるが、災害の予告の方が何と云っても圧倒的に多い。けれどもこれらの災害も、充分気をつければ、起らないですむようにしてやろうと保証される。仮りに、どうしてもそれが不可避のものであっても、出来る限りにその程度をやわらげる様に努力することが約束される。

一月一二日に、もう一度火災に会うぞ。(イ一五、テ二〇・B・一二〇―一二四)

と警告されるが、それに対して、二八日の成田の不動さんのお祭りに行つて、お払いしてもらえば、この火事も、のがれることが出来る。(イ一五、テ一〇・B・一二五―一三〇)と防止法を教えている。その他に、

八月一日は食物から中毒にかかる。(イ二二、テ一〇・A・一一五―一一八)  
といったものから、

一月中旬頃から風邪を引き、長引いて、心臓の方も少し心配になるかも知れぬ。(イ二二、テ一二・A・二三〇―二三五)

七月二三日、水のみ合わせから下痢に苦しむ、この頃赤痢がはやるから、この日は充分気をつければ、必らず変ることのないようにする。又旧暦十一月一日にお前の宝(子供)食中毒となるが、気をつけてくれれば変る事はない。(イ五、テ一一・A・二二〇―二二〇)

と云つた様なものは、未然に防ぐ事の出来るものであろう。いろいろとイタコのお仕事を聞いて、その結果云うことができるのは、災難の予告について、絶対に避けることの出来ないものはないと云う事である。依頼者にとってみれば、自分の近い将来に起るであろう災厄が予知され、しかもそれに対する適宜の処置をとるならば、その厄難すらまぬがれる事が出来ると云う保証は、之また心強い限りだと云わねばならない。

## 送 別

右のようなお仕事が終われば、いよいよ口寄せも、しめくくらねばならない。イタコを何時までも独占することは出

イタコと恐山 (小林)

来ない。

一〇〇

今日は呼ばわれて、まことにお粗末ながらのうらない(イタコのこと)であるけれども、われ一人の社やしらぢやないわ。すみずみ、うちうちまで届かんし、何と云うても、今日はまことに目出度いや…(イ二二、テ二二・A・一七二―一七五)

おそまつながらのうらないだ。やないであれば、まだまだ親子、並び兄弟もある。ならびの宝もあるけれども、すみずみ、うらうらまで届かんし…(イ二二、テ二二・A・二四〇―二四五)

したがって、又近い内には是非共呼びおろしてほしいと云う希望となってくる。

年に一度でも、三年に一度でも、この尊いお山にまいて(参拝して)、われ呼び寄せてくれるようにたのむ。(イ二二、テ二二・A・二三九―二四一)

慈覚大師の前で、ほのぼのとお前と顔の対面であれば、孫子手にかけて育てた甲斐があるとはこのことだ。七日七夜の苦言のがれるよりも、千ぶ万ぶ(よく意味は分からぬが千倍万倍の間違いであろう)のよろこびで帰る。(イ二二、テ一〇・A・一三五―一四〇)

娑婆に住む者からの口寄せによって、呼びおろされることは、死霊にとってよろこびであるばかりではなく、苦言苦業を逃がれることが出来ると云う実的な益をも、もたらすことになるのである。

今日は之で、いろいろあげてくれた進物いただいて、三五日お休み、七日七夜の苦言のがれて、よろこびもどるよ。あげものいただいて、娑はみえねど、声ばかり…。

七日七夜の苦言のがれ、靖国の大祭にあた(会った)よりもうれし…(イ二二、テ二二・A・二四〇―二四二)

よろこびを、七日七夜の苦言のがれるよりもうれしい、と云い現わしたイタコは数名にのぼっていた。又、なかには、えんま大王にみやげをもって、よろこんで帰る(イ七、テ一〇・九八一―一〇二)と地獄へ帰る同情すべき死霊もあった。えんま大王に休暇をもらって、娑婆までやってきたのであるから、帰るのに供えられた物を食べてしまわないで、えんま様にお土産にもって帰るとは、ほほえましいと云うよりも、涙ぐましい限りである。

こうした言葉の最後に結びの言葉として述べられるのが、  
いとま申そうや、送り申そうや、(イ二二号)

と云うのやら、

葉山のみぢで送り申そうや。(イタコ八号及びイタコ二八号の結びの言葉)  
などがある。さらにまた、

これにてさようなら、(イタコ一二号)と云う近代的なものもあった。これらがすべて終ると、かしわ手を打つイタコと、合掌だけで終る者もあった。かくして、死者の霊一柱についての口寄せはすっかり終了するのである。

## 結 び

右に取り上げたものは、イタコの口寄せとしては、形式、内容共に最も整ったもので、余り極端に走っていないものを選んで紹介したものである。したがって、可成り例外的に思われるものもあった。

たとえば、死者の霊の口寄せと云うよりは、イタコ自身が解説者、心理分析家のような立場に立って、極めて暗示

イタコと恐山 (小林)

的なことを中心にして語ること、などがそれである。イタコ一二号はその典型であった。彼女の場合は、極めて短かい招霊と送別の辞があるのみで、物語的なものは皆無であった。文学的な表現力も彼女には全くなかった。又、解説するところは、死霊のいdauerらみや憎しみに対する云いわけが多く、依頼者は多く暗然たる気持を抱いたに相違ない。横浜からわざわざやってきた中年の婦人などは、今後その死霊がいつまでも、崇つて不幸をもたらすと云われたので、真剣にその防止策をイタコにたづねていたが、結局は、そのイタコによって、お払いをしてもらう他に方法はないとの事であった。ただ彼女の場合は、他のイタコが殆ど強い津軽、下北地方の方言で語ったのに比べて、他方者には標準語によって語ったから、言葉の上で他方者を集めるのに有利であったが、土地の人々は余り寄りつかなかった。今にして思うに、彼女は伝統的なイタコの系統に属していないようである。しかも、彼女は正眼者であった。

イタコ一五号は、弱視であった。その語り方が物語り調と云うよりはやや強引な説教調、講演調であった。文学的表現力はむしろ乏しく、気迫と力で語っていた。口角あわを飛ばし、声量もあって、聞く人々をひきつけていた。イタコ一六号は全盲であったが、切々とした哀調をこめて語るので、多くの人は涙を流していた。表現力も豊かであった。イタコ一六号は、おそらく最もすぐれた霊能者であった。その語るところが依頼者や肉親の過去や現状とぴったりと一致する点が多く、その為にいつも多忙を極める程に依頼者があつた。しかも彼女の語り方は、義太夫の本格派とも思える程に巧みであった。声もよく、実感のこもった語り方で、聞く人々はすっかり魅せられていた。

筆者は、恐山でこれらのイタコの一人一人のかたわらに、ある時は立ち、ある時はしゃがみこんで、彼女たちの口寄せに幾時間も耳を傾けていたが、その結果として強く感じることは、依頼者の将来に対する吉凶判断が、イタコの第一の仕事であり、依頼者もまた最も望んでいることではない、と云う事である。むしろそれよりも、依頼者が肉親

の霊と声の対面をすることによって、この世では再びみることのないものとあきらめていた、愛する肉親との不思議な再会のよろこびを感じ、またその肉親の霊の変わぬ守護をいつも受けている事を実感することによって、不安のない未来に対して、安心感をもって臨むことが出来るようになることこそ、イタコが果している一番大きな貢献であると云えよう。

しかし、果してどの程度まで、イタコの口寄せが真実に肉親の霊を呼び寄せたとして受けとられているか、と云う問題が提起されるかも知れない。関西で生まれ、育ち、死んだ肉親の霊が、津軽弁で語りかけてくると云うのは、どう考えてみても信じられぬ事と思われる。が、この点について、筆者の経験について語ろう。それは、まことに不思議なものであつて、筆者も後に三人のイタコから、今はなき祖母と、戦死した兄の霊を呼びおろしてもらつたが、静かに耳を傾けてきくうちに、何時の間にか、それまでの研究者としての客観的な立場は失なわれて、真実に、なつかしい祖母の語りかけとして、愛する兄の言葉として、一言片句も聞き逃がすまいと、物語にきき入っている自分自身の姿を見出して、おどろかざるをえなかつた。これは、恐山を訪れた人々が、誰しも抱いた感慨であろう。筆者は、ここに恐山とイタコがもっている、まことに不可思議な魅力があると思うのである。

最後に、イタコと恐山の今後の問題について触れておきたい。前にも述べたが、イタコの絶対数は、年々減少していると言われる。その理由は、もちろん大都市と本州の北端とはまだかなりの事情の相違はあろうが、盲人に対する職場が段々と広がって、イタコ以外の職業についた方が、収入も多く、安定しているからである。それにもかかわらず、恐山に集まるイタコの数は、竹内夫人が調査した昭和三五年七月の大祭には、一六名であつたのが、本年（昭和四二年）には、三〇名とほぼ倍増しているのである。この事實は、恐山に参詣する人々の数が非常に増加した

ので、相当の収入を期待することが出来るためであろう。

ところで、最近一つの問題が、恐山を中心として論議されるようになってきた。それは、恐山が所在する「むつ市」が、下北地方開発の有力な手段として、この恐山に目をつけ、観光地として恐山周辺に温泉地を作り、恐山と温泉地とを結びつけて、より多くの人々を魅きつけようと云う計画である。これに対して、恐山の寺院側は、恐山を訪れる人々は、観光の目的でくるのではなくて、信仰の為に参詣するのであるから、恐山の世俗化、観光地化には絶対反対の立場をとっている。だが問題は、特定の寺院の問題にとどまらず、地方の経済開発<sup>(15)</sup>や、生活向上、と云った大きな問題がからんでいるので、信仰か観光かの問題は、ここ当分解決されそうにない。あくまで信仰第一の立場を譲ろうとしない寺院の立場は、奈良や京都の観光中心主義の寺院にはもって範とすべきものである。けれども、前にも述べたように、恐山にバスをチャーターしてやってくる人々が、全く純粹な信仰によって集まる人々であるか否かは、これらの実際の姿からみれば、判定のむづかしいところであって、宗教とレクリエーションとが、未分離の状態であると云った方が、より真実を正しく表現していると云えよう。

大勢としては、やはり世俗化、観光地化の傾向は避けることは出来ないであろう。またイタコの減少は、何時かは、イタコを無形文化財として保存を計らねばならぬ時代が、やって来ないとは断定出来ないのである。宗教学研究の立場からする筆者のいつわらざる気持は、恐山が、イタコと共に、観光ブームの流れに巧みに棹さすことをしないで、北奥羽地方の庶民の信仰の場として、出来る限り素朴な姿をとどめつづけてほしい、と云うことである。

注

(1) 清藤豊子「オシラ神とイタコ」(民間信仰)未発表レポート

ト、昭和三五年九月。他に朝日新聞に昭和三六年七月二六日から八月一四日まで連載された柳田国男氏の「柳翁閑談」の

切り抜き、さらに青森民友新聞に昭和三八年八月一四日から二〇日まで連載された新聞記者による現地レポート「川倉のイタコを見る」などであるが、特に「オシラ神とイタコ」は自分の直接調査した内容であって、貴重なものである。

(2) 盲人を厳密に定義することは困難とされているが、わが国において、慣例的に定められているものによれば、次のようになる。

全盲—万国式視力表によって、視力〇・〇二(一メートル指数)以下のもの。準全盲—右視力表によって、視力〇・〇二(二メートル指数)までのもの。弱視—右視力表によって、視力〇・〇四以上〇・〇三以下のもの。

榑原 清著「特殊教育」二九、教育大学講座、金子書房、昭和二八年、七三頁および七六頁。

(3) 柳田国男「柳翁閑談」⑧、朝日新聞、昭和三六年八月五日。

(4) 報恩寺とかつての盲僧都とが、どのような接触を保っているのかは明らかにできなかった。

(5) 清藤豊子「オシラ神とイタコ」、未発表レポート、註二二において、「イタコになるには、幼少の頃からイタコの家に住み込んで弟子入りし、一人前になるのに一〇年位かかると云われている」と誌している。

(6) オシラ神については、独立した研究テーマとなっている

イタコと恐山 (小林)

程大きな問題であるから、ここでは詳細に言及することは避ける。ただ簡単に紹介すると、オシラ神と云うのは、桑の木形の小さな恰好の衣裳をつけたものである。男女二神として、魔除けの神として、北奥羽の旧家でまつられているところが今でもかなりある。このオシラ神をあやつりながら、「馬娘婚姻物語」を物語るのが、久渡寺における大祭の中心の行事である。

(7) 小林行雄他編「神と神を祭る者」日本文学の歴史、第一巻、角川書店、昭和四二年、二三頁。

(8) 川上四郎著「徒然草」文研出版、昭和四一年、三二六頁—三二八頁。

(9) 石井進「鎌倉幕府」日本の歴史、七巻、中央公論社、昭和四〇年、三三八頁。

(10) 「県立公園、霊場、恐山詣の栞」恐山寺務所発行。

(11) 「恐山詣の栞」によると、次のように誌されている。「今を遡る一千年の昔、桓武天皇の御代、慈覚大師が唐の国にて修行しておったある一夜、聖僧の来りて『なんじ国に帰り、東方行程三十余日のところに至れば霊山あり、そこに仏道を弘めよ』と告ぐるを夢に見る。大師ただちに国に帰り、霊山何処ぞと、あらゆる国々を巡錫して辿り探ねたところが、この恐山である」。



- (12) 大間知篤三他編「日本民俗学大系」第一巻、平凡社、昭和三十三年、三六五頁。
- (13) 老婆の話すところによれば、二・〇〇〇円のうちで一・五〇〇円はテントなどの備品購入の為の積立金で、五〇〇円が場所代ということであった。
- (14) 竹内夫人が昭和三五年七月に調査したときには、一回に五〇円であったと云うから、現在では倍額となっている。  
清藤豊子「オシラ神とイタコ」一一頁。
- (15) この下北地方では、砂鉄がとれるので、三八年に「むつ製鉄」を作り始めたが、加工地が余りにも遠くはなれているので、製鉄所の建設工事を中途にして、二年前に解散してしまった。これで下北の経済開発はふり出しにもどってしまった。しかし、四二年の夏以降、以前海軍の要港であった大湊を中心として、日本における最初の原子力商船隊の基地を「むつ市」に建設しようとする計画が、急速に具体化しつつある。